

CHRISTIAN CLASSICS

NO. 2

NOTES ON GENESIS

BY C. H. M.

創

世

記

講

義

クリスチャン古典シリーズ第二集

C・H・マツキントシ著

山岸 登訳

創
世
記
講
義

NOTES ON GENESIS

BY C. H. MACKINTOSH

目次

第一章	一
第二章	二〇
第三章	三七
第四章—第五章	六五
第六章—第九章	六九
第十章	一三七
第十一章	一三三
第十二章	一三七
第十三章	一五七

第十四章	一七三
第十五章	一八〇
第十六章	一九七
第十七章	二一〇
第十八章	二二三
第十九章	二三三
第二十章	二四三
第二十一章	二四八
第二十二章	二五八
第二十三章	二七五
第二十四章	二八一
第二十五章	二九六
第二十六章	三〇一
第二十七章	三〇八

第二十八章·····	三三三
第二十九章—第三十一章·····	三三三
第三十二章·····	三四三
第三十三章—第三十四章·····	三五四
第三十五章·····	三六一
第三十六章—第三十七章·····	三六六
第三十八章·····	三七一
第三十九章—第四十五章·····	三七三

創
世
記
講
義

第一章

聖靈がこの崇高な書を開くために執られた方法には、特別に心を打つものがある。聖書は、直接私たちに、神ご自身の本質的充滿さと神の行動の独自性を示して、神ご自身を私たちに紹介している。序文のようなものは、すべて省かれている。そして、神ご自身に私たちは導かれる。私たちはいわば、神がご自身の永遠の力と神性とを展示される範囲を広げる目的のために地上の静けさを破り、地上の暗やみの上に輝く神の御声を聞くのである。

ここには、愚かな好奇心の餌となったり、あわれな人間の頭脳せんきくの詮索せんさくの材料となるものは一つもない。ここには、人の心と理性とに強い影響を与える、靈的力をもった神の真理の莊嚴さと現実さがある。奇妙な理論をとなえて、愚かな好奇心を満足させることは、決して神の御靈のなさるところではない。地質学者は地下をさぐり、そこから聖なる記録に加えたり、あるときは矛盾する材料を取り出すかもしれない。彼らは化石から推理するかもしれないが、神の子たちは、聖なる喜びをもって靈感の書を一心に読む。彼らは読み、信じ、そして礼拝する。この精神で私たちの前にあるこの偉大な書の学びを進めていこう。私たちは、「主の宮で、思いにふける」(詩二七・4)という

ことが何を意味するかを知ることができたら幸いである。聖なる書の尊い内容についての私たちの調査が、真の礼拝の精神で行なわれるように。

「はじめに神は天と地とを創造された」(1節)。この聖なる神の書の第一節は、すべての真の幸福の無限の源である御方の前に私たちを据える。神の存在の証明のためには、精巧に作り上げた弁証などはいらぬ。聖霊はそのような仕事とは関係しない。神はご自身を啓示なさる。神はご自身のみわざを通してご自身をお知らせになる。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」(詩一九・1)。「主よ。あなたを造られたすべてのものは、……あなたをほめたたえます」(詩一四五・10)。「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ」(黙示一五・3)。不信の徒か無神論者でなければ誰も、御口のことばをもって世界を造り出し、ご自身が全知、全能であり、永遠の神でいますことを宣言なさった御方のご存在の論証を求めはしないはずである。神以外に誰が物を創造しえようか。「目を高くあげて、だが、これらのものを創造したかを見よ。主は数をしらべて万軍をひきいだし、おのおのをその名で呼ばれる。その勢いの大いなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない」(イザヤ四〇・26)。「まことに、国々の民の神々はみなむなし。しかし、主は天をお造りになった」(詩九六・5)。ヨブ記(三八〜四一章)の中では、エホバ神ご自身が、創造のみわざをくつがえしえぬ証拠として、